

ダンジョンに出会いを求めたら黒の剣士に会いました？

アーズベント・ウィツカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『迷宮は呼ぶ、数多の生命に理不尽を課したものを。』

神は呼ぶ、新たな時代の対となる英雄を。』

キリトとベルのW主人公。

目次

白の冒険者と黒の剣士	1
ヘステイアファミリア	4
ミノタウロス	8
満身創痍	12
じゃが丸君	16
レアスキル	22
ウエイトレスの少女	26
本来の目的	29
弄られ兔	33
宴	37
強くなりたい	41
神の宴	45
怪物祭その1	49
怪物祭その2	52
怪物祭その3	58
第16話	62

白の冒険者と黒の剣士

『迷宮は呼ぶ、数多の生命に理不尽を課した者を。』

神は呼ぶ、新たな時代の対となる英雄を。』

—————

「ここは、何処だ？」

澄んだ風が辺りを駆け抜ける。その影響か肌寒さを感じ、朦朧としてた意識が一気に鮮明になっていく。

気付けば、全く記憶にない街路に俺は立っていた。

まるであの時の様だと少し感傷に浸ると同時に、頭の中で何故このような事態になっているか考える。

あの時は、【死銃^{デス・ガン}】の最後のひとりジョニー・ブラックによってサクシニルコリンを注射されたのがそもそもの始まりだった。おかげで、現実世界以上に年取ったり、貴族に絡まれたり、最高司祭と闘ったり、果ては色んな意味での世界大戦と来たもんだ。いや、考えるべきはその事じゃ無い。

何だかんだあつたが、俺は無事現実世界に戻れた筈だ。

ここまではいい。だが、問題は別だ。俺は何故こんな見た事も無い街路に立っている？ 町並みは綺麗に整えられているが建築様式は今の物じゃない。もっと昔、中世のヨーロッパとかの物だと思う…多分。最も、俺の抱いてる中世ヨーロッパのイメージはゲーム由来の物で、確かな知識とは言いがたい。

まず、思うのがこれがゲームの中だと言う可能性。だが、その可能性は低いと思ってる。第一にこんなリアルなゲームはある例外を除いて存在しない。大抵のゲームはフルダイブとは言っても多少なりとも違和感が存在する。なのにそれが無い。まるで本物の現実だと五感全てが訴えている。ある例外なら、今の状況全てに説明が出るがそれは無いと、俺の勘が言っている。状況的にはそれしか無いはずなのに。

「うわあ！」

答えの出ない問題に頭を悩ませ、その場でぐるぐる回っていると走って来た誰かとぶつかってしい倒れてしまった。その拍子に情けない声が双方ともに漏れてしまった。

「ごめんなさい！ 僕が前見てないせいで！」

「いや、こっちこそごめん。ちよつと考え事してぼーつとした。」

ぶつかった相手は少年のようで直ぐさま謝罪の言葉を口にした。

真っ白な頭と赤い目が特徴的な少年だ。顔立ちはそれなりに整っていて荒事とは縁がなさそうなのに、その少年は革鎧を纏っていた。

そんな少年の謝罪に大してこちらも謝罪する。

俺の方も迂闊だった。考え事に集中し過ぎてここが街路で有ることをすっかり忘れていた。頭を擦りながら起き上がろうとしたら、少年が手を差し伸べてくれたので有難くあやかる。

「大丈夫ですか？」

「ああ、問題ない。所で君、革鎧なんか来てるけどどうして？」

つい、目の前の少年と余りにも不釣り合いな、革鎧が気になって聞いてしまった。

「あ、えつと僕一応冒険者なんですよ、駆け出しですけど。」

冒険者？ これまたゲームみたいな単語が出てきたな。やはりここはゲームなのか？ 菊岡さん達の達の悪いドツキリとか？ いや意味も無くそんな事しない筈だ。多分。：イマイチ信用出来ないからなあの人。まあ、でも答えがわからない事を一人で考えるだけ無駄か。なら、今は気になる事をこの少年に聞いてみるか。

「その冒険者ってのは？」

「え！ 冒険者を知らないんですか?!」

不味い。どうやら冒険者は知ってて当たり前のものようだ。ここはあの時と同じ記憶喪失を装おう。

「あーなんて言うか。俺、記憶無いみたいなんだ。」

「はあ、記憶が無いんですか。って！ 君、記憶喪失なの！」

「その通り」

「…もしかして僕がぶつかった所為で？」

「いや、その前からだから安心してくれ。で、冒険者って何だ？ ついでに一般常識も教えてくれると助かる」

しれつと、質問を増やす。

「ああ、良かった。いや良く無いんだけどね。えつと、冒険者ってのは迷宮でモンスターを倒してその魔石を売って生活する人の事かな」

「…ダンジョン、モンスターまんまゲームみたいだな」

「そうだ、君はファミリアには入ってる？」

「ファミリアが何かは知らないけど多分入ってないぞ」

「え、でもその格好君も冒険者じゃないの？」

今の俺の格好は、何故かs a o時代の黒マントだから冒険者とやらに見えるらしい。ファミリアとは、MMOで言うところのギルドみたいな物で神様とやらが眷属に恩恵を与えるそうさ。…神様、居るんだ。一度あつてみたいな。

「その神様に合うことは出来ないのか？」

「なら今からうちのホームに来てみる？ ヘステイア様今日バイト無い筈だし、君について何かわかるかも」

神様がバイトしてるのか…。

「そうしてくれたら有り難い、頼めるか？」

「勿論だよ。あつそうさ、まだ名前を言ってなかったね。僕の名前はベル・クラネル。君は？」

「俺の名前は桐ヶ谷 和人。キリトってよんでくれ」

こうして後の英雄達は出会った。

ヘステイアファミリア

「ここがホーム…」

ベルに案内されて辿り着いたのは、ボロボロの教会だった。とても神様の居住には見えない。そもそも住居かどうかとも怪しい。

「あはは、取り敢えず中にどうぞ」

促されるまま、教会に入る。中も外と同じボロボロではあるが所々に修復や補修の跡があり、掃除もしっかりしている様で大事にしているのが伝わってくる。少しして神様とやらが居る部屋の扉の前まで着いた。

「キリト、神様に君の事伝えて来るからちよつと待っていて」

「ああ、よろしくな」

任せてと行ってベルが扉を開けて部屋の中に入っていく。

「神様ー、今帰りました」

「うおい、ベル君！ どうして君がこの時間に?! 何か良からぬ事でもあったのかい?」

部屋の中から女性の声が聞こえてくる。何やら焦っている感じが声から見受けられる。

「その事何ですか神様！ 実はカクカクしかしかでして」

「何だって！ 記憶喪失してる人を連れてきた!!」

「はい、神様なら何か分かるかもしれないと思って…。」

「神と言ったってここじゃ色々と制約とかで大した事は出来ないよ？」

現にうちのファミリアは貧乏だしね。そのキリト君だけ? に会うのは構わないけどあまり期待しないでおくれよ?」

「はい、ありがとうございます!」

どうやら面会の許可は下りたようでベルがその事を伝えに来た。会話とか割りと聞こえていたけど、一応聞こえてない振りをしておく。

そして部屋に入ったら、一人の少女が立っていた。艶のある髪をツインテールにしている少女だ。童顔でもあり、ツインテールと合わせること、より一層幼さが際立つ外見をしている。部屋の中には他に

人は居ないので、この少女が件の神様…なのか？

「君がキリト君とやらだね、ようこそうちのファミリアへ。僕がこのファミリアの神様をしてるヘスティアだよ」

「どうやら、そうらしい。」

「キリトです。この度はあつて頂きありがとうございます。」

「あー、そういう堅苦しいのはいいって。神様といっても、別に偉いわけでも無いんだし。気軽に話しかけてよ」

「そうなんですか？」

「うん、私なんてついこの前までは友達の家でニートしてたし」

神様がニート…。この神様いろいろとフランクだな。いや、ベルに聞いた感じ大抵の神様はこういう感じかも知れないが。

「それじゃ、お言葉に甘えて。幾つか聞きたい事があるんだけど質問してもいいか？」

「ドンと来いだよ。でも、神だって知らない事があるからね、そこそこよろしく頼むぜ」

—————

あの後、幾つかの質問してみたが結局何も分からないままだった。自分の境遇とかは多少ボカして見たものの、結局ここがゲームなのかどうかもわからなかった。

ただ、迷宮に行けば何か分かるかもしれないと神様は言っていた。勘らしいが。俺もそんな気がするんだが、迷宮にはもつと別の気配も感じる。何かこう、嫌な感じとか何というか。

でも、言ってみない事には分かりっこない。迷宮に有るかもしれないと手掛かりを探す為、俺は迷宮に挑む事にした。

「そうと決まれば、うちのファミリアに入らないかい？ 君は何処にも入っていないんだらう？」

「いいのか」

「勿論だよ！ 最もこんな貧乏ファミリアは嫌だ！ とか言われたら何にも言えないけどね」

「いや、むしろこっちからお願いします。俺をファミリアに入れて下さい。」

「ああ、これからよろしく。歓迎するぜキリト君！」

神様が歓迎の言葉を口にするのと、俺と神様の話の時なるべく静かにしてたベルも同様に歓迎してくれた。

「これからよろしくねキリト」

「ああ、よろしくなベル」

そんな言葉を交わしながら俺はベルと握手をした。

「やいやい、男同士の友情を確かめるのもいいけどさ、先ずはキリト君に恩恵をあげないとね」

「あ、そうですね。キリト恩恵の話はさっきしたよね」

「レベルとかステイタスの事だよな」

如何にもゲーム見たいなシステムだなんて思って聞いてたからよく覚えてる。迷宮に挑戦するにはそれが大事らしい。

「そうそれ、今からヘステイア様が刻んでくれるよ」

「という訳で横になってね、すぐ終わるから」

「お願いします。」

—————

『キリト

L V . 1

力：I 50 耐久：I 50 器用：I 50 敏捷：I 50

魔力：I 50

《魔法》

【アイテムボックス】

・ 武器限定で異空間に収納できる

《スキル》

【黒の剣士】

・ 早熟する

・ 剣技に補正がつく

「……………」

……………

』

これが俺のステイタス。…流石にs a oの時と同じとはいかなかったか。だが、魔法もスキルも一つ以外身に覚えがある。アイテムボックスに愛剣が入っていれば有り難いんだけどな。そして、この読めないの何なんだ。

「うーん、このステイタスは…」

俺が自分のステイタスで考えごとをしていたら、神様も唸りながら俺のステイタスを見ていた。

「…何か悪かったりするのか?」

「いや、そういう訳じゃないよ。寧ろ凄くいいステイタスだよ。魔法とスキル二つ同時に手に入れるなんてね」

「え、キリト魔法とスキル持つてるの?!」

「ああ、有るぞ」

「いいなあ。僕も欲しいなあ。」

「どうやらベルは魔法やスキルを持ってないらしい。でも、ステイタスを更新していくと、偶に手に入るそうなので楽しみにしているみたいだ。」

「所で、君達は二人で迷宮に潜るのかい?」

「俺は、そうして貰えるかと有り難いんだが、どうだベル一緒に行つてくれるか?」

「勿論! 冒険者としては僕が先輩だしね。まずは冒険者ギルドに行かないと。」

「おっと、流石にこの時間からはオススメしないよ。ていうか、今日はキリト君がうちに入った記念にパーティーをしようじゃないか。」

言われて外を見れば、夕方近くになっていた。

何気に時間が経っていたらしい、そんな訳で今日は俺の加入記念でじゃが丸パーティーが行われ一日が過ぎていった。

ミノタウロス

ヘステイアファミリアに加入して早、半月。冒険者生活にもそれなりに慣れ始めた矢先、俺達はそいつと出会った。

牛の頭に人の身体をしてる牛頭人身のモンスター【ミノタウロス】に。

ミノタウロスが獲物を前にした肉食獣の様に瞳をギラつかせ、咆哮を上げる。

『ブモオオオオオ!!』

「うわあああ!!」

俺達二人は阿吽の呼吸で逃げ出した。

—————

ミノタウロスは一定のペースで俺達を追いかけて来る。そんな背後から迫る恐怖を紛らわす為、隣で並走してるベルに疑問を投げかける。

「おい、ベル！ ミノタウロスってもっと下の階層で出てくるんじゃないか?!」

「そのはずだって！ なんでこんな浅い階層にいるの?!」

投げかけた疑問はベルも感じてたらしく、酷く動揺していた。当たり前だ。冒険者になってから、俺もこの世界のモンスターについて色々調べた様になり、モンスターの知識はそれなりに頭に入っている。だから、当然ミノタウロスの事も知ってはいる。本来ならもっと下の階層に生息するモンスターのはずだ。そして、討伐に要求されるレベルは2。今の俺達レベル1だけでは到底勝ち目の無い相手だ。本当、なんで居るんだよ!!

あれよあれよと逃げ回る事数分。俺達は足を止めた。何故ならー

「…なあ、ベル。」

「…なに、キリト。」

「俺達さ、奴にあって咄嗟に逃げ出したよな」

切れる筈だ。

「そんな、キリトを置いてなんて！」

「俺も後から逃げるから先にお前だけでー！」

「又もや、台詞の最中に攻撃が来る。すんでの所で転がり、回避する。」

「お前、人の喋ってる時ばかり狙うなよ！ 性格悪いぞ！」

悪態を吐きながら、俺は構える。手にはs a o時代の愛剣アニールブレードが握られている。これは、俺の魔法のアイテムボックスに入っていた物だ。他にも武器だけなら、s a o時代だけでなく、アルブヘイムやガンゲイル、果てはあの世界の物も入っていた。だが、レベル1で大層な剣を持っていても、良からぬ輩を呼びかね無いので、今は無難にこの剣を愛用している。

ミノタウロスが動く。その巨体な見た目からは、考えられない速度で突進してきた。だが、速いと言っても、避けられない程じゃ無い。突っ込んで来るミノタウロスを寸前で交わしながら、カウンターで右薙ぎを見舞う。

タイミングは完璧だった。しかし、俺の剣はミノタウロスの脇腹に深く食い込んだだけで止まった。肉が硬すぎて断ち切れなかった。

剣を引き抜こうとするも、上手くいかず隙が出来てしまう。

ミノタウロスがその隙を見逃すはず無く、斧が俺を真つ二つにする軌道で振り下ろされる。

「キリトー！」

ミノタウロスの斧が届く直前、俺はベルの体当りによってなんとか無事にその場を退避出来た。だが、どうして。

「ベル！ 何で!?!」

「僕も、戦うよ。」

「勝てる相手じゃ無いんだぞ！ 戦う理由だって無いのに！」

「キリトが戦ってる。それだけで、僕が戦う理由になるよ。」

「…死ぬかも知れない相手だ」

「大丈夫、キリトと一緒になら勝てるよ。僕達は友達でパーティーで相棒なんだから」

その瞬間、ベルが今はもう居ない親友と重なった。…俺って案外単

純なんだな、今の言葉を聞いただけで負ける気がしなくなった。

俺は、魔法のアイテムボックスを使い武器を取り寄せる。

「顕現せよ、『夜空の剣』『青薔薇の剣』」

背中に出現した剣の重みを感じる。俺の持つ最高の剣達だ。手に持ち替え二刀流の構えを取る。

「勝つぞベル！」

「勝とうキリト！」

『ブモオオオオオオー！！！！』

ミノタウロスの咆哮が合図となって俺達の戦いが始まった。

満身創痍

ミノタウロスの咆哮が迷宮に轟く。それを合図に俺達は駆け出した。

左右から迫る俺達を見て、ミノタウロスは距離が近いベルに斧を振り下ろす。それを余裕を持ってベルが回避する。流石の敏捷だな。ちなみに、ヘステイア様にステータスを更新して貰ったら、俺達はその結果を勝負していたりする。力は俺で敏捷はベルがそれぞれ大差で勝ってる。他のはどっこいどっこいだ。

ベルに当たらなかつた斧は地面にクレータを作った後、元の高さに戻り、今度は俺に向かって振り下ろされる。

「ツー！」

俺もベルと同じ様に回避するが結構ギリギリだった為、髪が何本か空を舞ってしまった。

二人に続けて躲された事ことで、ミノタウロスはむきになり、俺達に向かって何度も斧を振り下ろす。まるでモグラ叩きの様だ。もつとも、むきになった分、余計な力が入って振り下ろし自体は拙いものになっている。

だが、長身に加え、長い腕と斧のリーチでミノタウロスの攻撃射程は俺達のものより断然広い。こう矢鱈滅多に攻撃してくるんじや、迂闊に近付けない。

このまま、躲し続けるのにも限界がある。そう思った時、ベルが目で合図を送ってきた。ミノタウロスに接近するつもりらしい。確かに、避けるのに精一杯な俺より、余裕があるベルの方が接近しやすいだろう。

なら、ベルがやりやすい様に、ミノタウロスの意識を俺に向けなくては。

「こっちだ牛野郎ー！」

俺は、足下の石を数個拾い。ミノタウロスに向って投擲する。ダメージこそ期待出来ないが、うざったらしいことこの上ない筈だ。何回か繰り返したら、俺に対して明らかに攻撃回数が増えてきた。成功

だ。だけど、やばい。回避がヤバイ。段々、当たりそうになってくる。只でさえ、ギリギリだから躲すのではなく走り続けることでやり過ごしているのに。

だけど、ベルが突撃するにはまだ足りない。もっと致命的な隙を作らなければ。ここは勝負だ。

覚悟を決めて俺は走るのを止め、ミノタウロスの一撃を二本の剣をクロスさせ受け止める。

「クロス・ブロッカー！」

武器が重なった瞬間、途轍もない衝撃が俺を襲う。ミノタウロスの見た目通りの馬鹿力が武器を通して腕に伝う。

…本来ならレベル2が相手する相手だ、いくら、力のステータスが高いと言っても所詮はレベル1。普通ならミノタウロスの攻撃を受け止める事だつて難しい筈だ。それがなんとか出来ているのは、スキルの剣技補正のお陰だろう。

s a oのソードスキルを使うと補正がつく仕様みたいで、普通の攻撃よりも威力、防御力どちらも高い。それと武器による所も大きいと思うのだが…何となく、前より性能が低下している気もするが多分気のせいだろう。

俺とミノタウロスの武器の押し合いは徐々に、俺が押し負けていく。

(…流星に返しきることは出来ないか…。)

ジリジリと後ろに引いていく俺を見て、ミノタウロスは愉快そうに吼える。斧を受け止めた時に、ニタリと笑ってやった事へのお返しだろうか。

…けどな、俺に集中しすぎだミノタウロス。

意識を完全に俺に向けているミノタウロスは気付かない。すぐ後ろに、既にベルがいる事を。ベルはミノタウロスの背中に飛びつく。何事かとミノタウロスが背中を確認しようとするが、それより速く、ベルがミノタウロスの右眼にナイフをねじ込む。

高い硬度をもっているミノタウロスも、流星に眼球は柔らかいみたいだ。…というかベルの奴何気に酷い事を。

ら、ミノタウロスに躰に一線が走った。

『ヴォ?』

「は?」

「え?」

その線はミノタウロスの躰を次々に走り抜け、やがてミノタウロスだったものは只の死体へと変わった。

「あの…大丈夫、ですか?」

現れたのは、金髪の少女だった。

じやが丸君

「あの、大丈夫ですか？」

蒼い装備に身を包んだ、金眼金髪の女剣士。

ロキ・ファミリアの【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。

冒険者で知らない奴はそうそう居ない高ランク冒険者だ。現に冒険者になって半月の俺だって知っている。

「あ…ああ、大丈夫です」

いきなりの状況の変化に戸惑いながら質問に答える。

俺の返事に彼女は頷き、続いてさっきから黙っているベルに近付いく。

「…貴方の方は？」

ベルにも同じ意味の問い掛けがされる。

「うわあああー！ー！ー！ー！」

が、ベルは逃げ出した。脱兎の如く。

「おい！ ベル！」

突然の逃亡に思わず声を荒らげるが、ベルには届かたかった様でそのまま何処かへと消えて行った。

ベルが逃げた事で、空気が微妙な感じになってしまった。えっ何、何で俺初対面の高ランク冒険者とこんな変な空気になってるの？

ベルの奴、覚悟しとけ。今日はお前の分のじやが丸君はないからな！

「…私、あの子に何か悪いことした…？」

変な空気は彼女の問い掛けで解消された。

ベルが逃げだした事を自分の所為なのかと、聞いてきたのだ。

「いや、そんな事ないと思う。寧ろ助かった、ありがとう」

「…ううん、お礼をいわれる事はして無いよ。このミノタウロスを、私達を取り逃がした所為で君達は襲われたんだから。…ごめんなさい」

なるほど。要は下層から逃げ出したミノタウロスに俺達は運悪くであってしまった訳か。

「いやいや、謝る必要無いって。故意でやった訳じゃ無いんだろ、俺達

も何とか無事だったし。」

「…その事、何だけど。…君達はミノタウロスと戦ったの？」

「…」応戦しました。」

主に不意打ちや、挑発、急所攻めだったが戦いには変わりない。…改めて考えると姑息な事ばっかだな。

「…君達、駆け出しじゃ無いの？」

「…駆け出しです。」

俺もベルも、半月程度の新人だ。

「…このミノタウロス、私がつけた以外の傷が結構ある。…もしかして、私余計な事しちゃった？」

彼女はミノタウロスの死体と俺を交互に見ながらそんな事を聞いてきた。

「いや、そんな事無い。正直助かった」

あのままじゃ、無事に勝てたかどうか怪しい。いや、負けるつもりはサラサラ無かったけど、無事にとはいかなかっただろう。

俺の回答で、彼女のもしかしてモンスターの横取りをってしまった？
？ みたいな不安顔が元の無表情に戻った。

「…良かった」

彼女はモンスターの横取りが杞憂だったことで安堵しているのか？

「あ、ベルが心配なんで俺はそろそろ戻るよ。ベルにも今度お礼と逃げ出しの謝罪させるから」

俺は、そう言って地上に戻ろうとしたら、

「…あの、ミノタウロスの魔石、持っていかないの？」

聞き捨てならない事を聞いてしまった。

「え、魔石は倒した君の物じゃ」

「…うん、元々こっちの所為だし、それに私が止め刺したけど、死体を見たら君達の方がダメージ与えてる。だから、君達の物。」

そこまで言うなら貰わない訳には行かないよな。決して魔石で入る金目当てではない。

「…じゃあ、貰います。」

そうやって、恥ずかしげも無くミノタウロスの魔石を貰い俺は地上に帰った。

去りゆく少年を見ながらアイズは考える。駆け出しがたった二人でミノタウロスを瀕死に追い込んでいた事実を。

本来、レベル差は絶対だ。ミノタウロスのレベルは2に該当するのに対して彼らは駆け出しのレベル1。勝てる筈のない差がそこにあるはずなのだ。

それなのに彼ら二人は、倒してこそいないが、それはアイズが介入あつたからと考えると…もしかしたら、アイズが介入しなければあの二人は倒していたかも知れない。レベル差をものともせず。

(…あの二つの剣、多分業物)

アイズは考える。あの二人がミノタウロスと戦えた理由を。

(…ミノタウロスの躰を斬ったのは、あの黒髪の子。あの二つの剣での二刀流なのかな？ 白髪の子はどんな戦い方だろう？ 傷は両方とも負っていた、黒髪の子だけじゃ無くて、白髪の子も戦つてたはず。)

アイズは自身が強くなる事に重きを置いている。そんなアイズからしたら、あの二人の少年は気になる存在だ。あの二人の事を知れば、自分をもっと強くなれるのでは無いか、そんな思いが胸中を巡る。ほんとはもつと質問したかったが、仲間が心配とあつては止められない。つぎ、あつたときに白髪の子にはまず謝ろう。

そして、出来ればあの二人に強さの秘密を聞こう。アイズは密かにそう決意した。

冒険者ギルド。迷宮から持ち込まれる素材を買い取ったり、冒険者のサポートをしてくれたりと、冒険者にとっては無くてはならない組織だ。

そんなギルドのカウンターに探していたベルがいた。何やら落ち込んでいる様子だ。そして、ベルの目の前にはハーフェルフで俺達の担当職員のエイナさんがいる。

…よし、大体察した。逃げよう。

「キリト君！ 逃げないでこっちに來なさい！」

俺が、見つからないよう逃げようとした瞬間にあたかも知っていたかの様に対応されてしまった。

「何ですかエイナさん」

俺は努めて、爽やかに俺何も悪い事してませんよアピールをしながら笑顔でベルの隣に座る。

「その、取ってつけたような笑顔はいいから。君も私に謝ることあるでしょ？」

おかしい、俺のポーカーフフェイスがひと目で見抜かれたしまった。そして、やはりお説教コースらしい。ここで、言い訳しても結果は変わらない。ここは正直が一番だ。

「すみません、エイナさん言いつけより下層に潜ってました」

俺の正直な自白に女神の様に優しいエイナさんは――

「正直でよろしい。さあお説教ね」

――普通に説教してくれた。

「大体、キリト君は冒険し過ぎよ。ベル君もそうだったけど今ほどじゃ無かったわ。君とパーティー組んでから私の言いつけをより一層、守らなくなったのよね」

エイナさんのお説教は痛い、言ってることは至極正論なので、もはや物理的に効いてくる。

「別に、君とベル君のパーティーは良いとは思うけど。仲だつて凄くいいし。でも、もうちょっと私の忠告に聞く耳を持ってくれないじゃない。」

「もつともで。」

「それと、キリト君。君はちゃんと反省しなさいよ。ベル君は一応反省するけど、君は一応の反省もしないでしょ」

おっと、流石にそれは言い過ぎやしませんか？ 俺だって叱られたら反省しますよ。そう心で思っていたら

「因みに、このやり取り軽く五回はしてるわよ」

エイナさんが冷たい目でそう言った。：すみません。

「さて、説教はこれくらいにして、キリト君はちゃんとシャワー浴びてきたのね。そこは偉いわよ」

「俺は？」

えつまさか。

「ベル君なんて、全身返り血だらけでギルドに来たんだから」

うわあ、それはないぜベル。俺達、一緒にミノタウロスの返り血盛大に浴びただろ？ あのミノタウロスが死体が変わっていく時に。

「…うう、すみません」

ベルは顔を赤くして恥ずかしながら謝った。

「そうだ、ベル。何で、さつき逃げ出したんだ？」

「えっと、それは…」

「逃げ出した？ それってどういう事キリト君？」

「いや、なんかベル。アイズ・ヴァレンシュタインさんに声掛けられたのにいきなり逃げ出したんですよ」

「あーそういう事。それでかあー」

何やらエイナさんが納得顔をでベルをニマニマ見ている。対してベルはさらに顔を赤くして縮こまっている。なんだこれ？

「キリト君、実はねー」

「あー！ああー！！ そうだ、キリト！ じゃが丸君に新味が出たらしいよ、今すぐ行くこうよー！」

なにやら、言いかけたエイナさんの言葉を遮りベルがじゃが丸君の話をしだした。

「それはいいが、今じゃ無くて良くないか？」

「駄目だよ！ 新味なんて皆もの珍しがって、すぐ無くなるよ?!」

「そうかもしれないが、別に今日食わなかったって」

「神様のバイト先の新味だよ！ 神様の眷属として、発売日に買わないとー！」

ベルの余りの勢いについて頷いてしまい、そのままじゃが丸君の新味を食べに行く事になった。

エイナさんは、口元を抑えて笑いをプルプル震えていた。

レアスキル

ベルに連れられ、じゃが丸君を買いに行ったらヘステイア様が丁度仕事終わりだったらしく俺達は一緒にホームに帰還した。

「全く、君達は本当に危なっかしいね」

ホームに着いて俺達がミノタウロスに襲われた事を話すと、先程購入したじゃが丸君の新味、あずき抹茶味を食べながらヘステイア様が呆れた様のため息をつく。

「大体、君達がミノタウロスに襲われた階層ってまだ行くなって担当の職員に言われてたんだらう？ 言いつけはしっかり守らないと。それにー」

話がいつの間に説教が変わっていた。本日二度目の説教だ。しかも、注意を受ける割合は俺の方が多い。自業自得ではあるため、グチグチとまるで嫁を前にした姑の様な説教も甘んじて受ける。

「ー」と、まあ色々言っただけど無事で二人が良かった。」

説教を終えたヘステイア様が俺達二人を抱き寄せる。まさしく女神の抱擁だった。

「君達は、二人しかない僕の大事な眷属なんだ。あまり、心配させないでおくれよ」

ーーーーーーーーーーーー

「はい、キリト君。めちやくちや上がってるぜ」

説教が終わった後、俺達二人はステータス更新をしていた。先に俺からしたのだが、ステータスが軒並み上がっていた。相変わらず、読めない所は変わっていないが。ステータスの上昇は多分スキルのお陰だろう。

「相変わらず力が突出しているねー」

俺の力のステータスはもう直ぐで上限に達する程に上がってる。俺としては、敏捷や器用をもっと高くあげたいのだが。力だけが規格外に高い。ベルの敏捷も似たようなものだ。

「続いてベル君。こっちにおいて」

「はい」

俺が終わりベルの番になる。普通ステータス更新の時は神様と眷属の二人きりらしいが、俺達は更新後の結果比べをやってる為、そこから辺はなあなあになっている。

「はい、出来たつと。て…何だい、このステータス」

ベルのステータスを紙に写し終え、それを見たヘステイア様が驚愕している。

「神様、どうかしました?」

「いや、何でも無いよ。ベル君のステータスはこれだよ」

「うわあ! 凄い全部上がってる!」

自分のステータスを見て、はしゃぐベルとは対照的にヘステイア様はぶすつとした表情でベルの背中を見ている。

まるで、親の仇を見るような目で見てる。ベルのステータスに何かあったのか?

「そういえば、君達を助けたアイズ・ヴァレンシユタインだったっけ?

どんな子なんだい?」

ヘステイア様が酷く怖い笑顔でアイズ・ヴァレンシユタインさんの事を聞いてきた。

「えつと、凄く強くて綺麗な人でした!」

ヘステイア様の笑顔に疑問を感じていないベルが素直に思った事を告げる。

すると、ヘステイア様の眉がピクピクと痙攣した。

「…へー強くて綺麗なんだ。それじゃあ、彼氏の一人や二人は居るんだろうねえー。」

「え…。」

ヘステイア様の言葉にベルが固まった。

「まあ、どのみち、ロキの所の眷属なら君達二人には縁が無い子だけだね。」

「…………。」

ヘステイア様による追加の口撃でベルはノックダウンされた。俺だって、鈍い訳じゃ無い。さっきのギルドでの事と今のベルの反応を

見れば、ベルがアイズ・ヴァレンシユタインに想いを寄せているのは明白だ。でも、何でヘスティア様は気づいたんだ。

まあ、どのみち違うファミリアじゃ、ヘスティア様の言う通り婚約なんて出来ないけど。俺には彼女が居るから関係ないが…。

…俺は何時まで、ここに居るのだろう。

—————

(なんだい、なんだい、ベル君の奴！ 今日会ったばかりの女性に惚れるなんて)

ヘスティアは先程みた、ベルのステータスを思い出して憤っていた。

《スキル》

【憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果持続。
- ・懸想の丈により効果向上。

(なんなんだい！ あの片思いみたいなスキルは！)

ベルに新しく芽生えたスキル。それを見てヘスティアは自分に敵が出来た事を知った。何を隠そう、ヘスティアはベルが好きなのだ。乙女的に自分以外の女性によって、こんなスキルを発現させられたらそりゃ、怒るだろう。ただ問題はそれだけで無く。

(これも間違い無く、レアスキルだ。キリト君のと同じ。効果も少し似てる。でも、それよりベル君は、絶対に渡さないからな！ ヴァレン某！)

レアスキル、その名の通りスキルの中でも希少だったりするものの総称だ。これを他の神に知られたら厄介な事になる。本来なら、そっちの方が重大なのだが、恋する乙女にはライバルの存在の方が重要らしい。

—————

その夜、ベルは今までの日々を振り返っていた。

キリトと出会って半月ぐらいか…。

最初に記憶喪失と言われた時は吃驚したけど、一緒にファミアリアになって、一緒に迷宮に潜って、一緒に冒険していく内にそんな事はどうでも良くなっていた。

今まで、年の近い友達が居無かったからかもだけど、キリトと過ごす日々はいつも新鮮で驚きの連続だった。

キリトは何時も頼りになる。ミノタウロスに遭遇した時だって、自分分は戦うのに僕には逃げろと言った。…あの時、本当は怖かった。ミノタウロスを前にして、逃げるところか一步も動けないでいた。目の前にいる存在のすべてに圧倒されて、自分はここで死ぬんだと思い込んでいた。

そんな相手に、キリトは一步も引かず戦っていた。それどころかカウンターでミノタウロスに傷を負わせた。そのまま倒せるんじゃないかと淡い思いを抱いた。だが、現実はそんなに甘くなく、キリトに致命的な隙が生まれてミノタウロスの一撃を喰らいそうになる。

この時、キリトを特別視してた事に気付いた。キリトなら大丈夫、何とかしてくれる。根拠も無く蒙昧にそんな事を心で思っていたのだ。馬鹿だ。僕はとんでも無い大馬鹿だ！キリトなら大丈夫？そんなわけ無いだろ！キリトだって死んだら終わりなんだ！僕が助けなきゃいけないんだ！

そう思ったら、ミノタウロスに怯えて動けなかった身体が自然に動き出しキリトを助ける事が出来た。

そして、僕は吹っ切れた。過ぎた時間は少なくとも、キリトは僕にとって大事な相棒だ。そう思うと、興奮からか普段は言わない言葉を口にだしていた。でも、その言葉に嘘は無い。僕はキリトと二人一緒なら、どんな困難だって乗り越えられる。今度は、盲信じゃなく信頼でそう思った。

ウェイトレスの少女

「ふあゝ」

早朝のメインストリートを歩きながら、俺は欠伸をする。

元来、夜型である俺にとって朝早くに起きるといのは拷問に近い。だが、相方であるベルがこの時間から迷宮に潜るとあつては流石に三度寝、四度寝は出来ない。…二度寝ぐらいは多目に見て欲しい。

「相変わらず眠そうだね、キリト」

俺と同じ時間に寝て、同じ時間に（ベルの方が早起き）起きているといるのに、全然眠く無さそうなベルが言う。

「そういうベルは眠く無さそうだな、神様の抱き枕は寝心地がいいらしい」

「ちよ！ 何言ってるだよキリト！ あれは神様が寝ほけてただけで、決してやましい事は！」

「はいはい、そういう事にしとくから余り大声出さないでくれ。頭に響く。」

「本当に何も無いよ！」

実は、今朝ベルの寢床にヘスティア様が潜り込むという事件があった。…十中八九わざとだろうが。

だけど、その時のベルが上げた驚きの奇声で起こされた身としては、嫌味の一つや二つは言わないと気が済まない。

しかもベルがヘスティア様が居ることに慌てて飯も食わずにダンジョンに向かったものだから、パーティーである俺も仕方無しに後に続いた。当然、飯は食べていない。

大体ベルの奴、神様の気持ちに気付かないってのはおかしいだろ。あれだけ、アプローチされているのに。傍目から見てる俺が気付くくらい積極的なやつを。

そんな有り得ないレベルの鈍感な癖して、ダンジョンに出会いを求めてるといのは如何なものか。…まあ、出会い自体はあったが。ベルが理想としての出会いとは全然違っただけ。

「まあ、それはそれとして。飯どうする？」

「…それは、僕の所為だから奢るよ」

「おお、そうこなくっちゃな！ それじゃこの前見つけた、安くて上手い屋台にでも行くか」

「キリトってそういう店よく見つけるよね」

「おう、暇な時は大体散歩してるからな」

「そうなんだ、今度僕も一緒にーーツ!!」

会話をしていたら、突然ベルが振り返って辺りを見回した。いきなりの事で、驚くが取り敢えず同じ様に辺りを見回す。

…普通だ、普通の町並みだ。行き交う人々、カフェテラスで別れを告げられてる男性、ウザい顔の猫、振られてる男性とは打って変わって一人の男に三人の女性が誰を選ぶのと迫る修羅場…いや、ちよつぴり気になるけど、急に振り返る程でも無いはずだ。

「おい、どうしたんだベル？ いきなり振り返って」

「…誰かに視られてる気がする。」

「視られてる？」

「…キリトは感じないの？」

「俺は何も、強いて言えば周りの目が痛いぐらいだ」

俺達二人が辺りを見渡すのを見て、多くの人が奇異の目で見てくる。感じるはその位だ。

だが、ベルが感じてるのはもつと別の視線なんだろう。ベルが嘘をつく事は無い。だとすると、どこかに居る筈だ。ベルを視てる奴が。

「あの…」

『!』

後から声が掛けられる。俺達は直ぐさま反転し、身構える。

声を掛けてきたのは、ウエイトレスの様な格好をした少女だった。

…しまった、警戒していた所為で過剰な行動を取ってしまった。悪い事をしてしまったな。

「ご、ごめんなさいっ！ ちょっとびっくりしちゃって…!」

「悪かった、右に同じくびっくりした。」

俺達二人は頭を下げ謝罪を行う。

「いえ、こちらこそ驚かせてしまって…」

こちらの謝罪に対して少女の方も頭を下げてきた。こっちが過剰過ぎたのに、いい子なんだろうな。どことなく違和感があるが。

「な、何か僕達に?」

「あ…はい。これ、落としてましたよ」

ベルの質問に少女はそう答えて、手を差し出す。その上に乗っていたのは魔石だった。

「…ベル、日頃無駄使いするなって言ってる癖に大事な稼ぎを落とすなよ」

「えっ、僕? キリトじゃ無くて?!」

「その子はベルの前に魔石を向けてるんだから、落としたのはベルのはずだ。」

これで、俺だったら恥ずかしいがそれは無いはずだ。

「あっ、はい。貴方が落としてましたよ、これは」

「あ、あれ?」

やはりな。

「はは、やつぱりお前じゃん。大体俺は直ぐ換金するから手元にある訳がないぞ」

「それは、僕だって…」

「これに懲りたら、俺の探究心を無駄使い呼ばわりはやめて貰おうか」

フハハハと高笑いしながら勝利の余韻に浸っていたら、魔石をベルに渡した少女がこっちに来て何かを差し出してきた。

「それで、こっちが貴方が落とした物です」

…差し出されたのは、ミノタウロスの魔石だった。…そういえば、結局換金するの忘れてたな…ははは。

「…あ、ありがとう。」

「キリト、君だって人の事言えないじゃ無いか。」

ベルの冷たい目が痛い。少女の苦笑いが心に刺さる。

本来の目的

「…あの、お二人は冒険者ですよ？　こんな朝早くからダンジョンへ行かれるですか？」

「はい、ちよつと早起きしたんで軽く行ってみようかななんて…」
落とし物を届けけてくれた少女の問い掛けにベルが応える。俺は頷きながら補足を付け足す。

「その前に腹ごしらえしないとな」

「…朝食まだ何ですか？」

俺の付け足しに少女はほっぺに手を添えて首を傾ける。…あざとい。

「ああ、今から屋台に行く予定なんだ」

「なら少し待ってて貰っていいですか？」

そういうと少女は近くのカフェテラスに入ってしまった。あの店のウェイトレスなのだろうか。さっきの修羅場な人達もあそこのカフェに居たよな。…もう居ないか。地味に結末知りたかったな。

そんな野次馬的な思考をしていたら少女が戻ってきた。手に何やらバスケットを持っている。

「これを良かったらどうぞ。驚かせたお詫びです。」

バスケットの中にはパンやらチーズやらが入っていた。

「ええっ！　そんな、僕達が勝手に驚いただけですし、大体これって貴方の朝ごはんじゃ?!」

ベルが手を振りながら遠慮する。

「いえいえ、お腹を空かしているお二人を見捨てたら、私の良心が痛んでしまいそうです。だから、是非とも受け取って下さい。」

「ず、ずるい…」

こんな言い方されたら断りにくいよな。特に、心優しいベル何かは。俺だって普通に受け取ってしまう自信がある。ただ、このウェイトレスの少女…仕草が凄いいざとい。天然なんだろうが、これが計算だったら恐ろしいな。

「なんでしたら今日の夜、うちの店に食べに来て下さい。その為の対

働として、これを受け取って下さい。新規のお客様が増えるのは、お店として大歓迎ですからね」

「…本当にずるい」

同感だ。今ので断る事が出来る奴はそうそう居ないだろ。

「ベルの負けだな」

「キリト…」

「貴方にも言ってるんですよ？」

「おう、俺は元から貫うつもりだから問題無い」

「そうですね、いい事です。」

うんうんと頷きながら笑顔を見せる少女は、俺とベルを交互に見た。

「それでは、お二人の来店をお待ちしております」

そう言つてペコリと少女はお辞儀をする。

「あ、そうだ僕…ベル・クラネルって言います。こつちが」

そのまま歩いて去ろうとした時にベルが、思い出した様に名前を名乗る。そして、視線が俺に向けられる。その意図を察して俺も名乗る。

「キリトだ。」

「貴方の名前は？」

最後にベルが少女の名前を尋ねる。…何気にコミユ力高いよなベルって。

ベルの質問に瞳を見開いた後、直にはにかんで少女は名乗る。

「シル・フローヴァです。ベルさん、キリトさん」

—————

ウェイトレスの少女こと、シルさんから貰った料理を食べた後、俺達は迷宮に潜っていた。

「今日は言い付け守って下層には行かないんだね」

「…人を問題児みたいに言うな、と言いたい所だが、日頃の行いの悪さ

は自覚してる。」

流石に、二回も連続で説教された翌日に言い付けを破る真似は出来ない。

「キリトに付き合う僕も僕で悪いけどね…」

「その通りだ、すっかり反省しろよ」

ベルが呆れた目で見てる。

「その台詞、キリトにだけは言われたくないよ」

ベルがジト目で言ってくる。…俺も、俺だけは言っちゃ駄目な気がする。

「…キリトはダンジョンに、記憶の手掛かりを探してるんだよね」

そういや、そんな設定あったな。記憶については嘘だが、ダンジョンに、元の世界についての手掛かりを求めているのは確かだ。

「そうだな、ヘスティア様の勘だとダンジョンに何かしらの手掛かりがあるそうだ。俺もそんな気がする。」

「何で、ダンジョンなんだろう？ 記憶とかは普通、知り合いとか住んでる町とかで思い出す物じゃ無かったけ？」

「勘に意味を求めても仕方無い。取り敢えずはダンジョンの攻略しながらゆっくりやっていくよ」

他に手掛かりが有りそうなのは神様達だが、他のファミリアの神様にそうやすやすと合える訳ないから、地道にダンジョンを攻略していくしか無い。

そんな会話をしながら歩いていると、モンスターが現れた。

「来たぞ、ベル」

「コボルトだね」

コボルトは群れで行動する。現に八匹のコボルトが通路を塞いでいる。

数的にはコチラが不利だが、問題無い。正直この階層で出現するモンスターには遅れを取る気がしない。だから、言い付けを破ってついでに下層に行ってしまうのだ。

予想通り、最初に二匹を俺とベルが一瞬で始末すると、その事に混乱して動きが鈍り残りも容易く屠る事が出来た。

コボルトの魔石を剥ぎながら、感想を言い合う。因みに、荷物持ち専門のサポーターなる者が居るらしいが、今の所縁が無いので俺達は自分達で荷物を管理している。

「…やっぱり、歯ごたえ無いな。油断するつもりは無いが」

「…そうだね、エイナさんにステータスの事いつて下層の許可貰う？」

俺としては、それでも良いんだけどな。

「そうだな、帰ったらヘスティア様に相談して見ようぜ」

弄られ兎

「…キリトの凄く上がってるね」

「…そう言うベルもな」

迷宮から帰ってきた俺達は、ヘステイア様にステータスの更新をして貰った。

結果、俺達二人のステータスは上がっていた。異常な程に。

おかしい：ステータスの伸びが高すぎる。俺達は互いのステータスを何度も確認しながら、間違いでは無いかとヘステイア様に問い掛ける。

「間違いでも手違いでも無いよ。そのステータスは正真正銘、君達のこと」

機嫌が悪そうにヘステイア様が間違いでは無いと断言する。

「でも、キリトは解るけど僕が同じくらい上がってるのは…」

確かに異常な上昇率だが、俺には一応原因らしきスキルがある。

【黒の剣士】このスキルには二つの効果があるがその内の一つに早熟すると言うものが有る。ヘステイア様によればステータスの上昇が速くなる効果だそうだ。

これが、原因だと思うのだが…それでもおかしい。このスキルはここまで劇的な上昇では無かった、少なくともいままでは。

いままでは、ベルの上昇率より若干高い位だった筈だ。

そのお陰で冒険者として、俺より速く活動していたベルのステータスに追い付いく事が出来ていた。

それなのに、いきなり何倍も上がるのはどうかしてる。…いや、スキルについて俺は余り知らない。もしかしたら何かしらの条件が偶々噛み合っこの様な事が起きたとも言えなく無い。

それに、まだ幾らか原因が解っている俺より全く原因が分からないベルの方が重大だ。

「知らないよ、それに理由なんてどうでもいいじゃ無いか。儲け、儲けとも思っておけばいいんだよ。上がって損する冒険者なんて居ないんだからね！」

「そんな神様……」

やはり、機嫌が悪いヘステイア様が頬をぷくうとさせながらベルの疑問を一蹴する。

…これなにか知ってるな、しかも何だか下らない事で俺達に黙っている気がする。ヘステイア様は色々顔にも態度にも出易い。

これに気付かないのはベル位だろ。だが、その事を言っても余計意固地になるだけなので敢えてスルーする。ヘステイア様が教えないならそこまで重要でも無いのだろう。この神様は自分に不都合だろうと俺達には真摯だ。

「今日僕は友達の家で食べて来るから、君達も男二人で虚しい食事を楽しむことだね！」

終始、機嫌が悪かったヘステイア様はそう言って出掛けていった。

残された俺達は今朝の少女との約束を果たす事にした。

—————

『豊穡の女主人』

店前にそう描かれた看板が置かれている店に入る。

記憶が確かならあの少女はこの店から出て来た筈だ。

その記憶は確かだった様で、店の中に今朝の少女を発見した。他にも同じウエイトレスの服を着てる従業員をチラホラ見掛ける。

特に目を惹くのは、エルフや猫の獣人の女性だ。

あと、別の意味で如何にも女将って感じの女性にも目を惹かれる。驚愕してるが正しい。

「来てくれたんですね。ベルさん、キリトさん！」

女将に気を取られていたら、いつの間にか近くに来ていたあの少女ことシルさんに声を掛けられる。

「…やってきました」

「約束したからな」

ベルが、店の雰囲気飲まれたようで何やらそわそわしてる。店の

客として多くの冒険者がガヤガヤ騒いでいるからだろう。

一方、俺は怖い店主の店で慣れているから臆す事は無い。まあ、客の多さは段違いだが。あの店、俺達以外に客見ないんだもんなあ。

「お客様二名入りまーすー!」

そのままシルさんに案内された席に腰を下ろす。

そこはカウンター席だった。

「アンタらが、シルのお客かい？　ははっ、二人とも冒険者らしく無い可愛い面してるね!」

ぐはあと俺とベルは二人してダメージを受ける。人が気にしてる事を…。

「いやいや、流石にコイツより可愛い顔してませんって!」

「えっ、ちよっキリト?!」

そう言つて、ベルを指差す。本当は反論したい所だが、この手の人に口で勝てる気がしない。なので、ベルを生贄にする。ゴメンな、今度じゃが丸君奢るから。

「確かに、こつちの坊やはウサギみたいだね!　まあ、あんたも可愛い事が変わりは無いがね!　なんなら女の子って言われても信じちまいそうだよ!」

ベルの生贄は効果が無かった。むしろ、俺の恥ずかしい過去を少し思い出してしまった。そして、ベルが凄いい睨んでくる。

「まあ、そんな可愛い顔して私らを泣かす大食漢なんだろ!　いっばい食つて金落としな!」

『?!』

なん、だと。

「ベル…：そうだったのかゴメンな、いままで気付かなくて。我慢…：してたんだな」

俺は悲しい（笑）感じを醸し出しながらベルに言う。

「ちよっ!　キリト?!　僕がそんなに食べれる訳無いって!　その事キリト知ってるよね?!　てゆうかその目!　絶対からかってるよね!」

「ああ」

「…」

ベルがこめかみを抑える。数秒たった後。

「キリト、一発殴っていいかな？」

「駄目だ」

「…」

ベルが再びこめかみを抑える。

「大体、責めるのは俺じゃなくてデマを流したシルさんだろ」

「…えへへ」

俺達が視線を向けたら、シルさんはお盆を抱えて誤魔化し笑いをする。…あざとい。

「いや、お二人の事話したら何でかこうなりました」

嘘だな。絶対わざとやってる。俺と同じで目が笑っている。

「…人間不審になりそう。主に君達の所為で」

「何だってー！ 大変だー！」

「とつても、とつても大変ですー！」

「その棒読み辞めてくれない？ 仲いいね君達」

さて、ベル弄りもここまでにするか、これ以上は後から何かされそうだ。しかし、シルさんも大概酷いな。話が合いそうだ。

その後、拗ねてるベルを構いながら食事をしていたらあるファミリアがやってきた。ベルの想い人が居る「ロキ・ファミリア」が。

宴

【ロキ・ファミア】

最強の一角と言われている探索系ファミリアだ。

昨日出逢った、アイズ・ヴァレンシユタイン氏が所属しているファミリアで構成団員は女性がやや多めで、幹部達の二つ名が【勇者】・【九魔姫】・【重傑】と、大層なものだった気がする。

【ロキ・ファミア】について、冒険者登録の時にエイナさんが教えてくれた情報を思い出しながら整理する。

「よっしゃあ！ 遠征ご苦労さん！ 今日は無礼講や！ 飲めやあ！」

赤髪の女性が乾杯の音頭を取る。…多分、あの人がロキ様何だろう。日頃ヘスティア様が怨嗟を唱えている人物の特徴と一致している。どこがとは言わない…。

「んなあ！ 誰かうちの事ぺちやばい言うたか?! ああ！」

俺の失礼な心の内を察したのかロキ様が怒鳴る。

…何で、そこそこ距離が離れているのに人の心を読めるのだろうか。神様達は本当にこう言った事には鋭い。それ以外は割りと天然なのに。

気付かれない様に、俺は目線を下げる。

そんな俺とは対照的にベルはあちらに興味津々だ。

目当てはアイズ・ヴァレンシユタイン氏だろう。遠目から見てるだけなのにベルの表情は真っ赤に染まっていた。

「そうだ、アイズ！ あの駆け出し達の話してやれよ！」

あちらの宴もそれなりの時間がたち、半分ぐらいの団員が酔っ払いへと成り果てていた。そんななか、銀髪の髪から出てる犬耳が特徴的な獣人の男がヴァレンシユタイン氏に話を振る。

「駆け出し達…?」

「あれだよ、帰る途中で何匹か逃げ出したミノタウロス！ それに襲われてる二人の駆け出し居ただろ！ あの半分トマト達！」

…これはひよっとしなくても俺達の話をだよな。半分トマトって

酷いな、確かに俺もベルも返り血で半身が真っ赤だったけど。

さつきまで、ぼーとヴァレンシユタイン氏を見ていたベルもその事に気付いた様で何とも微妙な顔をしていた。

「ミノタウロスって、襲って来たのを返り討ちにしたら、纏めて逃げ出して行った?」

「それだそれ! そいつら馬鹿みたいに上層に上って来やがったんだ、ったくいい迷惑だったぜ」

逃げ出したミノタウロスはアレ一匹だけじゃ無かったのか。

「それでよ、いたんだよ、駆け出しって感じのひよろくせえ冒険者二人が!」

うん、間違い無く俺達だ。駆け出しってのは否定出来ないが、ひよろくせえは勘弁して欲しい。

「ミノタウロスに駆け出しが襲われてたの?」

「ああ、そうなんだけど面白いのはそこじゃねえ! なんと、そいつら立ち向かってたんだってよ! ミノタウロスに! 馬鹿じゃねえの!」

だろ、アイズと犬耳の男はヴァレンシユタイン氏に確認を取る。

「:うん、少なくとも私が行くまであの子達は戦ってた」

「うへえー何でまた蛮勇?」

「俺が見た時は、逃げ道塞がれてたからなあヤケクソになったんだろ。まあそれでも、腰抜けよりかは全然マシだと思っぜ」

:アレ? てつきり俺達を馬鹿にするんだと思っただから意外な評価だな。

「まあ、そんなんより最後だ! アイズが助けに行つてミノタウロスを瞬殺したんだがよおー! そのミノタウロスの返り血おもつくそ浴びてんだよソイツら! いやあー傑作だったぜ! そしてアイズが近付いたら片方逃げ出したんだぜ! アレはミノタウロスよりアイズが怖いってこつたなあ!」

ガハハ、と腹を抑えながら爆笑してる犬耳男。やっぱり馬鹿にはしてんるんだな。

何気にヴァレンシユタイン氏にも失礼じゃ無いか? その発言。

いや、逃げ出したベルの所為でもあるが。

しかし、ミノタウロスより怖いアイズ・ヴァレンシユタインってな感じで周りは意外に盛り上がっている。

その原因のベルはというと、非常に変な顔をしていたに。これはアレだ、よくわからん。

「……あの子達は強くなる」

唐突に発せられたヴァレンシユタイ氏の発言でガヤガヤと騒がしかった室内が一瞬で静かになる。

疑問をぶつけたのは犬耳男だった。

「ああ、何言ってるんだアイズ？ ああのひよろくせえ奴等が強くなるって？ そりゃミノタウロスに挑んでんだ、そこらの雑魚よりかはマシだろうがよお。 どれくらい強くなるってんだよ？」

犬耳男の問に少ししてヴァレンシユタイ氏は答えた。

「…私達と同じかそれ以上」

放たれた言葉はさつきとは違い、そんな馬鹿など言う喧騒が返えされる。

「んなことある訳……」

「もしかしたら、あの子達は私が居なかったら、ミノタウロスを倒していたかも知れない……」

再び、静寂が辺りを支配する。それ程迄にアイズ・ヴァレンシユタインがいったことは衝撃的だった。ここで、そんな訳無いと嘘だと言うのは簡単だ。だが、誰も何も話さない。身近なファミリアの間はアイズが嘘をつくはずが無いことを知っている。身近では無い者も、アイズから放たれた言葉に嘘が込められて無いと

感じていた。

そんな色々とカオスな空気を一変させる者が居た。いや、神が居た。

「ああーアイズたん膝枕してえなあ、何なら胸枕でえもー」

…いや、ただの酔っ払いが居た。

酔っ払いのお陰で何処となく緊張していた空気を緩和する。

なお、その所為で幾人かがずっこけるといふギャグが起こったが些

細な事だ。

こうして、「ロキ・ファミリア」の宴は変な収束を迎えたのだった。

強くなりたい

「むむっ、今僕にとって非常に好ましく無い事が起こった気が…」

バイト仲間達と夕食を共にしていたヘステイアだが、無駄に精度の高い乙女の直感が働き、端正な顔をむすーと歪める。口に残っている食べ物が影響してその顔はリスの様だ。

「どうしたんだい？ ヘステイアちゃん、そんなふくれっ面晒して？」
そんなヘステイアに、エールを片手に持つふくよかな女性が話し掛ける。

「おばちゃん…いや、何だか僕のベル君が何処ぞの女に言い寄られている気がしてね。」

「何だい、嫉妬かい？ 神様ともあろうお方がそんなちっさな事で不機嫌になるのはどうかと思うよ？」

「むっ、確かにそれはそうんだけどね。何しろ僕にとっては二人しかいない大事な眷属なんだ、ちよつと位構いすぎたっていいじゃ無いか。」

「そういうもんかね」

どこか釈然としない様子を見せる女性を横目に、ヘステイアは二人の眷属を想い浮かべる。一時中断していた食事を再開させながら。

現在、ヘステイアのファミリアには二人の眷属が所属している。

白髪赤眼で素直なベルと黒髪黒目で好奇心旺盛なキリト。

どちらも少年だがある意味対照的な二人だ。

ヘステイアはその内の一人、ベルに主神としてじゃなく女として浅くない想いを抱いている。だから先程不機嫌になったのだ。

もつとも、それはそれとして、もう一人のキリトにもヘステイアは構いまくる。

ヘステイアは知っている。キリトが自分達に幾つか隠し事をしてる事を。その一つが記憶喪失という嘘だ。

だが、ヘステイアはそれを見逃している。何れ打ち明けるだろう確信があるからだ。…只の感だが。

(…まあ、悪い子じゃ無いのは確かだし。ヤンチャだけど。…ベル君

にまでヤンチャが移りそうでそこは嫌なんだけどね)

口をモグモグさせながら、ヘステイアは二人の眷属の事を考えるのだった。

—————

俺達は【豊穰の女主人】から拠点に戻っていた。

帰ったやいなや、俺達二人はソファアに座り込む。二人分の体重によつて沈みゆくのに身を委ねながらベルに話し掛ける。

「…良かったな」

「…そう…だね」

何がとは聞いてこない。当たり前だ何に対してなんか決まってる。『——あの子達は強くなる』そう言われた。今の俺達なんかより遥かな高みに身を置く人に。…盗み聞きだけど。

特にベルにとつては想い人に褒められたのだ。俺よりも感動は大きいだろう。

「でも、素直に喜べないかな…」

「どうしてだ？」

「きつと、あの言葉は僕一人じゃ言ってもらえ無かった。キリトと一緒にだったから貰えたものなんだ。」

「それを言うなら俺だつて、ベルが居なかったら貰えなかった筈だ。そういう意味じゃあの言葉は俺達二人で貰えたものだ。」

俺の言葉にベルは目を見開く。何かおかしな事言つたか？ いや、臭い事言つてる自覚はあるが…。

「は、はは。そうだね僕達二人で貰ったものだよね…盗み聞きしてたから貰ったとは言えないけど。」

「いいだろ、貰つとけ。言質とは言わないが、俺達の事何だから」

俺の言葉にベルは笑いながら、キリトはやっぱり図々しいねと言われた。

「キリト」

笑いを止めたベルが真剣な瞳で俺を見る。

「僕は強くなりたい。あの狼の人に言われた事に悔しさを感じたし、何より僕達は強くなると言われた。だから僕は強くなりたい！」

「俺もだ。俺も強くなりたい。俺だって男だ。あんな事言われたんじや引き下がれ無い。いつかあの狼男ギャフンと言わせてやる。」

互いに覚悟を伝え合い、俺達は拳を合わせるのだった。

「もういいかい？」

『！』

いきなり掛けられた声に俺達は揃って驚いた。声の主は姿を見なくても分かる。分かるけど、出来れば違つて欲しかった。

「へ、ヘステイア様！ いつからそこに?!」

ベルがどもりながら聞く。

「いつからつて最初からだよ。君達二人にお帰りつて言ったのに二人共無視するんだもん、反抗期かと思つたよ」

えっ、挨拶されてたのか？ 全然気付かなかった。迂闊過ぎるだろ俺達！ よりによつて一番見られたくない人に恥ずかし物を見られてしまった！

「で、二人して強くなりたいって何があつたんだい？ 勿論僕に聞かせてくれるんだろうねえ」

ヘステイア様はニタニタと邪悪な笑みを浮かべて、愉快そうに笑う。話したら最後、絶対からかわれる。

夜の静寂が辺りを包むなか、ヘステイアファミリアのホームである教会は静寂とは無縁で三人の声が賑やかに響くのだった。：内、二人は悶絶する声だったが。

—————

白衣を纏つた男が迷宮に居た。ツカツカと男は迷宮を歩く、そのペースは一定で淀みが無い。時折、男は周囲を見渡しては思案顔を浮かべる。それでも、ペースは落ちない。不意に男の耳に獣の唸り声が

届いた。

だが、男はそれを気にせず寧ろ唸り声の方へと進路を変更する。

「ブモオ」

進路を変えて数分、男の目の前には何匹ものミノタウロスが存在した。それを見ても男は臆さない。

男は武器は愚か防具すら纏っていない。当然だ。男はつい先程、迷宮に現れたのだ。

「ブモオー」

そんな男にミノタウロスの一匹が斧を振り下ろす。男の頭をかち割る様に振るわれた斧は、男の頭上で何かに阻まれたかの様に弾かれる。

「ブモオオオオオオー」

何が起きたか理解出来ないミノタウロスであったが、そんな事はどうでもいいともう一度、斧を振ろうとして腕が無い事に気づく。腕が無い事に悲鳴をあげそうになったが、次の瞬間には既に意識が無くなっていた。全身が斬られたミノタウロスを見て、男はふむと頷く。

その場に居た他のミノタウロスは、理解出来ない光景の前に逃げ出した。だが、数秒もしないうちに全てのミノタウロスは意識が途絶えた。

ミノタウロスの死骸を見下ろしながら、男こと茅場明彦はまた歩き出すのだった。

神の宴

「ガネーシャ・ファミリア」の本拠『アイアム・ガネーシャ』には現在、多数の神が訪れていた。『神の宴』そう呼ばれるパーティーの来賓達である。

この『神の宴』は下界に降りた神達が集まる為の物だ。何だかんだと言って気まぐれな神達が、それなりの数集まるにはこの様な場が必須である。

集まった神の中にはヘステイアの姿もあつた。普段なら参加しないヘステイアだが、今回はとある目的があり仕方なしにやって来ていた。

そんなヘステイアだが、パーティーで遭遇した女神ロキと言い争いをしていた。元々、ヘステイアとロキの仲は宜しく無い。ロキがヘステイアの一部に嫉妬して突っかかるのだ。

「このドチビがあー！」

「この貧乳があー！」

互いにメンチを切りながら相手のコンプレックスを罵る。

ヘステイアはロリ巨乳。対して言い争うロキは背丈は普通だが胸は絶壁である。……つまり、そういう事だ。ロキはヘステイアの胸に嫉妬している。持つ者巨乳と持たざる者貧乳の対立は何かと根深い。

そんな二人の低レベルな争いを間近で二人の女神が見ている。いや、最初にヘステイアと話していたのはこの二人で、話の途中でロキがやって来てこの状況になっっているのだが。

「よく毎回飽きないものね…。見るに耐えないわ」

右目に眼帯をしている女神ヘアアイストスがため息を吐きながら呟く。

「そう？ 私好きよ。」

その呟きにもう一人の成り行きを見守っている女神が反応する。

他に三人の女神がいるというのに、その中でも明らかに突出している美貌の持ち主フレイヤが。

「…相変わらず物好きだね」

ヘファイストスは隣に立つフレイヤの趣向が今一理解出来ない。最も、ヘステイアとロキの低レベルな争いが好きなのは何もフレイヤだけでは無い。周囲にいる野次馬の神達だって酒の肴に見物しているのだ。

『やれやれーもつとやれー!』

『巨乳とまな板か…』

『ロリ巨乳が勝つのに千ヴァリス!』

『俺は、まな板に…』

『何だかんだタケミカツチが借金するのに一万ヴァリス!』

『安心しろ、奴は普通に借金する』

そんな野次馬の中からヘステイア達の元へと、一人の女神が進み出る。床まで着きそうなとてつもなく長い青みがかつた黒髪が特徴的な女神だ。

「…ヘス、ロキ、ヘフ、フレ…久しぶり。」

ヘステイア達の元に辿り着いた女神が挨拶をする。その声を聞いて、四人の女神は揃って目を見開く。自分達の名前をこの様に最初の二文字だけしか言わないのは一人しか心辺りが無い。だが、その者がこんな人が、もとい神が大勢いる場所にやってくるとは思って無かったからだ。それに特徴的な見た目をしているが、前にあつた時とは余りにも違い過ぎていた。それこそ別人といえる程に。

「その呼び方をするって事は君はレイフィナなのかな?」

「…うん。…この姿で会うの初めて?」

レイフィナと呼ばれた女神はそう言つて首を傾げる。それに返されるのは肯定の頷きだった。

「少なくとも、僕は初めてだ」

「ウチもやな」

「私もね」

「私もよ」

ヘステイア達は目の前の女神レイフィナと幾度かあつた事がある。その時の容姿は、胸まであるキラキラと輝く金髪にヘステイアと遜色ない大ききの胸や、女性にしては高めの身長が特徴的だった。

それが今居るのは、ロリ巨乳と言われるヘステイアと同程度の身長で床に着きそうな長い黒髪の女神だ。胸はロキよりかはあるが小さめである。

一見して同一人物とは言えない筈のレイフィナを前にヘステイア達は驚いたがそれだけだ。元々、本来の姿では無いと伝えられてた為にそこまでの混乱は無い。：姿が違い過ぎて唾然としたが。

「：なら、改めてこれが私の本来の姿。：驚いた？」

淡々とした口調でレイフィナが言う。本人にしてみれば茶目つ気を出して言っているのだが、違いが僅か過ぎて誰も気付かない。

「驚いたよ。姿もそうだけど、君がパーティーにやって来たことも。：寧ろパーティーに来てる事の方が驚きだけ。」

「：それはヘスが来るって聞いたから。」

「僕？」

レイフィナがパーティーに来たことは自分が来るからと言われ、ヘステイアは困惑する。ヘステイアとレイフィナはそこまで親しい訳では無い。会えば世間話をする位の関係は有ると思うが、わざわざ自分に会いにこんな神が大勢いる場所に来るとは思えなかった。

「：うん。：ヘスに聞きたい事があって」

「聞きたい事？ 何を聞きたいんだい？」

「：眷属出来たって聞いた。：その眷属に黒い子いる？」

「黒い子…。キリト君の事かい？」

聞きたい事が、自分のファミリアについてとはどういう事だと思いつながら、ヘステイアは黒い子で思い浮かぶ自分の眷属の名前を言う。

「：キリト。：その子は最近眷属になったの？」

「最近も何も、僕の最初の眷属のベル君だっつい最近眷属になったばかりだよ？ キリト君はその少し後かな？」

「へえー自分見たいなドチビの眷属なる物好きおんねんな。どういった子らや？」

「ロキの質問に答えるのは尺だけど、レイフィナも聞きたい様だしいか。一人は白髪で赤い目をしたベル君、もう一人は黒髪で黒目のキリト君。どっちもヒューマンの少年だよ」

ヘステイアの言葉を聞いてレイフィナとフレイヤの二人が笑みを浮かべる。

「…ありがとう。…知りたい事が知れた。…今度お礼する。」

「別にお礼とかは良いけど、何だつて僕の眷属が気になったんだい？」
ヘステイアとしてはあまり自分の眷属について探りを入れられたく無い。これが普通の眷属だったらそこまで思わなかっただろうが、あいにくベルもキリトもレアスキルと思われる物を持っている。そんな事が神々に知れたらとんでもない事が起きる。絶対に。

主審としてそんな事を認める訳にはいかないヘステイアは、レイフィナが何故、恐らくキリトの事が気になったのか知ら無ければならなかった。

「…一目惚れ？…みたいなの？」

『はっ？』

レイフィナからの予想外な返答にヘステイアだけでなく、フレイヤを除く二人の女神も素っ頓狂な声を上げるのだった。

怪物祭その1

ガヤガヤ。ざわ…ざわ…。

ダンジョンの探索は終え帰る途中、街は道行く人々の喧騒に包まれていた。

それ自体は何時もの事だが、幾つか気になる単語が聞こえてきた。

「ベル、怪物祭ってなんだ？」

「ガネーシャファミアリア主催のお祭りらしいよ。闘技場を使ってモンスター調教とかをやるんだって」

ガネーシャファミアリア…あの趣味の悪いホームが特徴的なファミリアか。モンスターの調教ねえ、よくもまあ地上でそんな物騒な事を。大手だから色々融通が効くんだろうな。警備やら人手やら。じゃ無きや、ギルドの許可が降り無いだろうし。

「キリトが知らないのは意外だったよ。こういうの僕よりキリトの方が詳しいから」

「いや、ここ最近はダンジョン攻略と訓練に時間を割きまくってたから、情報収集（買い食い）があんまり出来ないでいたんだ。それはベルも同じだろう？」

「そうだね、僕もエイナさんから聞いて知ったし。」

俺達は豊穰の女将での一件以来、強くなる為にダンジョン攻略や訓練を今までより多くするようになった。

お陰で、ヘステイア様とエイナさんからの小言も前より増えたてしまつが…。

まあ、それはそれとして。

「なあ、その怪物祭の日はダンジョン攻略休みでいいか？ 是非とも見てみたい」

強くなる為には休息も必要だろう。あまり急ぎ過ぎても良くない。それにモンスターの調教は是非とも見てみたい。

「いいよ。僕も見たいから楽しみだなあ」

「決まりだな」

怪物祭を満喫する事が決まり。雑談しながら歩いていたら誰かと

すれ違う。半ば反射的に振り返るがすれ違った筈の誰かは既に居なかった。

…気のせいかな。だがアレは…。

(白衣だったよな…。)

すれ違う時にみた相手の服装は白衣だった。

白衣自体はこの世界にもある。だが、感じた気配はかつて宿敵のものであった…。

(あり得ない筈だよな。だってー。『ここはゲームの世界じゃ無い』ー。)

半月。この世界で過ごした期間だ。その半月でここがゲームの世界では無い事を俺は確信していた。確かな証拠がある訳では無い。でも、ここは現実だと解る。理屈も理論も関係なくただそうなのだと理解している。まるで、最初から自分がこの世界の一員だったかの様にこの世界を受け入れている。

正常な感覚では無い、自覚はある。

それでも、この世界こそが自分の生きる世界なのだと想う気持ちが常に心の最奥で燻っている。もし、このままこの世界に何年もいれば俺はー

「キリト！」

「うわあ！」

ベルの声で深く沈んだ意識が覚醒する。

「よかった、キリトいきなりどうしたの？」

「いや、すまん。考え事してた」

「どんなこと？ 思い詰めた顔してたけど…。」

「ああ、えつとなー」

ベルの疑問を適当に誤魔化す。今はまだ言うべきじゃ無い。少なくとも、自分の事を打ち明けてない今は…。

—————

キリト達が歩く姿をカフェテラスから見ている二人組がいる。

その内の一人、ゴスロリの格好をした少女がニタアという効果音がつきそうな笑顔を浮かべる。

「キャハ！ みーつけた！ ねえねえアメリー見つけたよ！ 神様が言ってた黒い子！」

「良くやったなウエルガ。神も褒めて下さるだろう」

ゴスロリの少女に執事服を着た長身の女性が応える。なんとも異様な二人組ではあるが、誰も彼女達を気にしない。それどころか存在を認識すら出来ない。

「でもあの黒い子、あれ何か憑いてるよ！ さっき急に濃くなって気付いたけど！ 内の神様の仕業あー？」

「なに、それは本当か？ いや、【百目】のお前が言うんだ間違いない。

しかし、神からは何も伺っていない。何者かに先を越されたか…？」

「ううー！ どうするのぉ？ 一度見たからいつでも場所は分かるよ！」

「一度報告に行く」

「りよーかーい！」

怪物際その2

窓から漏れる太陽の光を浴びて、目を覚ます。

寝起きはいい方なので軽く身体を伸ばしたら、毛布から抜け出し、顔を洗う。

僅かに残ってた眠気も冷水で吹き飛ばし、そのまま頬を数回叩く。そして、完全に醒めた目で神様が何時も寝てるソファアを覗く。

「神様…。」

そこに神様の姿は無い。

神の宴とやらに行った神様はまだ帰って来ていないようだ。元々、何日か留守にすると聞いていたから問題は無い。けど、寂しさは感じてしまう。

「キリトはつと」

次いで、相棒の様子を確かめる。

まだ寝てるようで、毛布に包まって浅い呼吸を繰り返している。

何時もは飄々とした顔をしている相棒だが、寝顔はやけに幼く見える。

「朝だよ、キリト」

そんな相棒を起こす為、トントンと肩を叩く。

二度三度叩いても反応は無く、毛布をはいでも起きない。

今日は一段と頑固な様だ。

この状態のキリトを起こすのは面倒なので放置する。

寝坊すけな相棒は放っておいて、自分の支度を整える。

今日は、怪物祭の日。

何時ものダンジョン攻略は休みで祭りを楽しむ事になっている。

この日の為に、お金を貯めていたので財布にはそこそこの額が入っている。軽くリツチに成った気分だ。

如何にも駆け出しって感じの、何時もの服に着替えると、傷だらけの防具がやけに目立っていた。

防具だけで無く、服にも無数の擦れ跡や切れ目が見受けられる。

(そろそろ、新調しようかな)

服を変えるには随分と早いけど、このままじゃ使い物になら無くなってしまふ。単純に今攻略してる階層にこの防具じゃ耐えられない。普通なら真つ先に変えるべきなのに、僕もキリトもあまりモンスタ-の攻撃を喰らわなかつたからうっかりしていた。

(うん、今日ついでにバベルに寄つて防具を見てみよう)

身支度が終わり、朝ご飯を作っていたら匂いに釣られてかキリトが起きてきた。

ボヤ-としてるキリトは、眠そうな目を擦りながら片手を挙げて挨拶をしてくる。

「ふあー。おはようさん」

「おはよう」

起きたキリトは身支度を整え、テーブルに腰掛ける。

「確か今日が怪物祭だったよな」

「そうだよ。これ食べたらもう行く?」

今日の朝ご飯は、スクランブルエッグとベーコンとパン。

料理が微妙な僕にも簡単にできて美味しい完璧な朝食。

というか朝は、大抵がこのメニューだけ。

パンを頬張りながらキリトが頷く。

「そうしよう」

「待つニヤその白と黒の頭達ー!」

怪物祭のメインイベントである、モンスターの調教が行われるコロシ-ムに向かう途中。獣人の少女に呼び止められる。

その少女の服装には見覚えがあつた。豊穰の女将亭の給仕服だ。

「はい、これニヤ」

近付いてきた少女に財布を渡された。

「これは?」

「シルに渡してニヤ」

「シルさんに?」

だとしたら、この財布はシルさんの物なのだろうか？

財布と少女を交互に見ながら首を傾げていたら、少女の後からエルフの女性が現れた。こちらにも豊穡の女将亭の給仕服を着ている。

「アーニャ。それでは設定不足です。お二人も困ってー」

「あー。さてはアレだな、怪物祭に行ったはいいが財布を忘れてたと」
エルフの女性が言い終わる前に、キリトがぼんっと手を叩いて自分なりに納得のいく答えを言う。

そうニャそうニャと頷く少女とは対象的に、エルフの女性は少しムスツとした。どうやら、その通りだったらしい。

「そんな訳でして、シルに財布を渡しては貰えないでしょうか？ 私達はお店の方があるので。あの子も、折角お店を休んで行ったお祭りで無一文は可哀想なので。」

「そういう事なら、喜んで。シルさんには美味しいお店を紹介して貰ったのでこんぐらいは問題ないです。」

「それに、俺達も怪物祭を見に行くから丁度いいっちゃ丁度いいからな」

「ありがとうございます。シルに貴方達のような友人がいて良かったです。」

「シルを見つけたら、お土産沢山ついていってニャ。」

元気に手を振る獣人の少女と軽く頭を下げるエルフの女性を背に僕たちはコロシウムに向う。

—————

「べールーくーんー！」

がしっ。そんな音が聴こえそう勢いで神様が抱きついてきた。

「てっ！ 神様?!」

「やー数日ぶりのベル君だ。寂しかったぞチクショーー！」

コアラの様に抱きつく神様が僕の身体に頭をグリグリと押し込む。

「神様、神様。俺も居るって」

からかうような声の調子でキリトが自己主張する。

「知ってるとも。君にも会いたかったぞ。頭を出しなさい、撫でてあげよう！」

「いや、こんな往来でそれはちよつと…。ベルだけで勘弁してくれ」

「キリト！ また！ また僕を見捨てるの！」

僕だって今の状態凄く恥ずかしいんだけど！

周囲の目が痛い！

「見捨てるって人間きの悪い。譲ってるだけだつて。」

「騙されるか！ 面白がつてるでしょ！ 目が笑ってる！」

「ああ。」

…切れそうになるけど、それより今は目の前の神様だ。

「神様、今日は怪物祭の日ですよ。一緒に観に行きませんか？」

「むう？ 怪物祭？ あー、モンスターの調教とかってアレ？ うー

ん。僕としてあまり好きな物じゃないね。」

コアラ姿の神様が難しい顔をしたまま唸っている。

「なら、屋台の食べ歩きしませんか？ この日の為にそこそこ貯めてたんでいたので奢りますよ？」

「おお！ そいつは素晴らしい提案だベル君！ 皆で食べ歩きしよう

じゃないか！ どうせなら手を繋いで」

そう言つて、僕から降り僕達に手を伸ばしてくる。

僕は多少の恥ずかしさを誤魔化しその手を取る。

キリトも恥ずかしいのか、照れながら手を取る。

「神様、俺はモンスターの調教にちよつと興味があるから、途中から別行動で良いか？」

「うん。それは勿論だよ。というか、確かに僕はモンスターの調教とかは観たくないけど、君達が観たいのなら観に行けば良いよ。眷属の趣向を否定する気なんて僕には無いからね。そんな器の小さな神じゃ無いさ。」

「わかった。ならばベルはどうする？ 神様と屋台回ったあと一緒に観に行くか？ 元々観に行く予定だし。」

確かにモンスターの調教にはちよつと興味がある。神様がいいと言うなら僕も観ようかな。

「うん。僕も屋台の後、観に行くよ」

「ちえー。そうかいそうかい君達は、僕とのデートよりモンスターのあんな姿やこんな姿が観たいのか」

「えっ、ちよ神様？ 言い方言い方。」

「ベル、落ち着け。からかつてるだけだ。」

「そうだとも。それより、モンスターの調教を観るなら早めに屋台回りをしとかないとね。さあ、行こうか二人共。」

そう言つて神様は歩きだー転けた。

両手を僕達が握つてるせいでバランスを崩した様だ。

「……………」

赤面する神様。

「……………」

目を逸らす僕達。

『……………』

周囲で見えていた通行人達。

何とも言えない気不味い空気が周囲を覆いそうになった時。

『キャー—————』

甲高い女性の絶叫が辺りに響いた。

「キリト」

「ベル」

お互いに名前を呼び、臨戦態勢を取る。

絶叫は近くから聴こえた。

なら、直ぐに何が原因かは解る。

神様を庇いながら声の方向に氣を向ける。

「原因はアレだな」

キリトが呟く。

「だろうね」

僕も続く。

視線の先にはモンスターの集団が居た。

種族はバラバラで統率の取れてない動きを見れば、群れでないことが解る。

実際にモンスターの集団は各々勝手に散らばっていつている。

最終的にこつちに向かってくるモンスターが四体。

それぞれ、レッドドッグ。ブルーバード。シルバーファング。ブラックファングって名前のモンスターだ。

正直、今の僕達じゃキツイ。

「…どうする？」

「やるしか無いよね」

戦って勝てる保証は無い。強さだって、数だって違う。

でも、だからって周りの人達を見過ごせ無い。

そして、何より。

神様の目の前で情けない姿は見せたく無い！

走って来る四体のモンスター。

僕達はそれを武器構えて待ち受ける。

怪物祭その3

四体のモンスターがそれぞれの速度でこちらに向かって来る。最初に来たのはブルーバードだった。

名前通りの蒼い鳥で猪ほどの巨体なのに空を優雅に駆ける姿は幻想的とも言える。だけど、見惚れている余裕は無い。

空を飛ぶモンスターとは戦ったことが無い。

空中に留まられたら攻撃のしようがないけど、幸いブルーバードは遠距離攻撃手段を持っていない。

攻撃手段は体当たり、噛みつく、つつく程度だとモンスター関連を扱う本に書いてあった。

キリトと一緒に勉強したお陰でこういう知識は頭にはいつてる。

「ヒャー」

見た目の美しさに似合わない奇声をあげながら、ブルーバードが突進して来る。

その軌道にある身体を僅かにずらして短剣を添える。

「ヒャー!!」

勢いをつけ過ぎて、回避出来なかったブルーバードは自ら短剣に斬られていく。

致命傷程では無いが、小さくも無い傷を受けブルーバードは怯んだ。

その隙を見逃さず、ローキックを見舞う。

「ヒ、ヒー」

ローキックによって道に叩きつけられたブルーバードは羽を広げ空に逃れようとするけど、ビクビクと震えて上手く飛べていない。だからといって、油断せずに首を撥ねる。

「ヒャー………!!!」

「…なんだろう、凄い罪悪感がある」

きつと、首を撥ねるときに漏れた断末魔のせいだ。これが、もつと醜悪なモンスターならそこまで無かつただろうけど、見た目が良いせいで余計に罪悪感が増した気がする。

ズギャン!!!

感傷に浸りかけた僕の耳に破碎音が響く。

音の発生源を見れば、キリトとブラックフアングが戦っていた。レッドドッグは既に倒した様だ。一刀両断されてる。

これで、数的不利は無くなった。モンスター達が連携しないお陰で助かった。だけど、フアング二匹がまだ残ってる。

「ガアアアー!」

「来た!」

僕に向かってホワイトフアングがやって来る。さっきのブルーバードのやられ方を見たせいか途中で突進の速度を緩めている。

あの速度なら方向転換も出来るだろう。同じ手は使えないか。

どっちみち、ホワイトフアングに同じ戦法は意味ないけど。

皮膚が硬すぎて、この短剣じゃかすり傷しか負わせられないし。

「ガアー!」

ホワイトフアングが両手で拳を作り真上から振り下ろす。

軌道を十分に見切って躲した拳はそのまま地面に当たり、周辺に軽い揺れが起きる。

…一撃の威力がこの上なく高い。まともに喰らえば一発KOもあり得る。

(まあ、喰らうつもりなんてないけどね)

僕は、顔をニヤってさせてホワイトフアングを見る。

意味が判ったのか顔を赤くなり鼻息が荒くなる。

タゲだっけ? キリトに教えてもらった技だ。

これが毎回美味いこと嵌まる。ある程度知能があるモンスターに限定してだけ。

今の状況で一番起こっちゃいけないのが、フアング達を逃がす事だ。既に周囲にいた人達は避難しているけど、今日はお祭り。いつも以上に人がいる。この場で逃してしまったら別の所で被害者が生まれるかもしれない。

だから、フアング達には僕達の相手をしてもらわないと。

それに、逃がさなければいいだけでこいつ達を倒したって、助けが

来るまで粘ってもいい。

焦る必要は無い。

「ガアアア!!」

幾度も拳が躲された事で腹が立ったのか、ファングが見境なく暴れる。駄々っ子の買って買って買ったまましていると云うのが正直な感想だ。

ただ、被害が比じゃない。

整備されていた道路は所々が壊れ、その破片が空を飛び壁に、窓に、女性下着に穴を開ける。

大迷惑だ。

(これ…請求とかされない、よね…?)

内心アワアワしながら対処法を考える。

下手に近づけば、巻き込まれる。そして、近付いたとしても有効な攻撃方法が現状ない。

(どうする? この短剣じゃ急所じゃ無いとダメージを期待出来ない。)

「いつて! 何か飛んできた!」

手詰まりな現状を思案していたら、キリトの呑気な声が聞こえてきた。どうやら、ファングが道路の破片が頭に当たった様だ。割と危ないと思うけどあの反応なら大丈夫。キリトの頭硬いし。

「ごめん! キリトそれこっちのファングの仕業」

「てことは、そっちもまだ倒して無いのか。どうする? このまま応援を待つか?」

「キリトの剣でも倒せないの?!」

「今の剣でも、切れることは切れるが切れ味が悪い。研いでないからかしらないが。周囲に人が居たから癖でアニールブレイドにしたが、もう少し上のランクにしとけば良かった」

ああ、そうか。キリトって変に絡まれない為に何時もアニールブレイドを装備してるんだった。今日はダンジョンに行かないから武装しなかったらしいけど。やっぱり便利な魔法だ…て!

「キリト! その上のランクの武器に短剣ってある?! 僕の短剣じゃ

「そもそも切れそうに無くて！」

「悪い！ 持ち合わせてない！ 長剣なら幾らでもあるぞ！」

長剣か流石に余り使った事が無い武器をいきなりは厳しい。

こうなるとキリトに倒して貰うしかないか。

「長剣は遠慮するよ。ただ、僕がそっちのフアングのタゲ？ も取る

からキリトはランクの高い剣に変えー！」

「ちよい。ちよいい！ 待った！ 二人共待ったー！」

僕達の会話に神様が入り込む。

「ベル君！ 短剣なら僕が持つてる！ 間違いなくあのゴリラを切る短剣を！」

「本当ですか！」

「勿論。ただ、少し特殊な短剣でね、使うにはベル君のステータス更新をしないとイケないんだ。だから、時間を稼ぐのはキリト君の方に頼めないかな」

「俺は問題ない。一時的にゴリラが増えても大丈夫だ。それに一匹はただ暴れてるだけみたいだしな。」

使うのにステータスの更新が必要な短剣？ よく解らないけど、取り敢えずはキリトに任せて僕はステータスの更新を行った。

第16話

ヘステイアは土下座していた。

相手は神友であるヘファイストスだ。

無論、訳はある。

ヘステイアはヘファイストスに頼み事があり、その為の誠意を示しているのだ。決して土下座すればどんな事でも許されるという虚言を信じての行動ではない…はず。

「はあーわかったわよ。作ってあげるわ、あんたの眷属の短剣。でも、もう一つの相談事って何よ」

数日の土下座を見せられたヘファイストスが根負けし、ヘステイアの願いであるベルへの短剣が作られることになった。

ヘステイアの頼み事は2つある。

一つは、ベルの武器。

キリトは性能が破格の魔法のお陰で武器の心配はしなくていい。

だが、ベルの方はそうはいかない。急激に強くなつていくベルに使われ続ければ、対して高く無いギルド支給武器の短剣では長くは持たない。

そして、キリトとの面会だ。

キリトは記憶喪失だと言っているが、それは嘘だ。ただ、何かしらの理由で神に会いたがってるのは知っている。実際自分と会ったとき、いくつがおかしな質問をされた。あれを他の神にも聞きたいのだろう。

と、ヘステイアは考えている。

若干の違いはあれど、キリトが神達に会いたがってるのは事実だ。

ヘステイアと比較的親しい神の何人かとは既に知己を得ているが、基本ギルドの工房にいるヘファイストスは未だあつた事がない。

「相談つてのはね、僕の眷属にキリト君って子が居るのは話したよね？」

「確か、二人目の眷属だったわね」

「うん、キリト君は何やら訳有でね。神達に会いたいらしいんだ」

「訳って？」

「それは分からない。記憶喪失なんて下手な嘘で誤魔化してる。…そう、下手な嘘なんだけど。僕達の嘘を見抜く能力の反応が鈍いんだ。まるで、ノイズが混ざってるみたいだ」

「…なんで、そんな怪しい子を眷属にしたのよ」

「しようがないじゃないか…。ベル君に続いて僕なんかのファミリアに入って良いっていう優しい子なんだよ。大抵の子供達に断られまくった僕を主神と認めてくれるんだよ!! その場の勢いでファミリアに迎えてしまっても良いじゃないか!!」

そう叫んだ所為で、足が痺れて正座のままだったヘステイアは、バランスを崩し身体が床に当たりそうになるのを胸がクツシヨンの役割をし阻止したものの、振動が足にいき声にならない悲鳴をあげた。それを見たヘファイストスは万感の思いを込めて呟く。

「…私はあんたの頭が心配。」

――

「ベル君、終わったぜ！」

ステータスの更新を終えた神様が僕に一つのナイフを渡してくる。

「神様、これが…？」

「そうだよ、これがあのゴリラ達を切れる…。いや、ゆくゆくはどんなモンスターだろうと切れるナイフさ！」

「どんなモンスターも?!」

「このナイフは特別製でね君のステータスに連動した性能を発揮するんだ。つまり君が成長すればするほどこのナイフも一緒に強くなるんだ！」

神様が得意げに話す内容に僕は驚愕していた。

使い手と一緒に性能が上がる武器なんて聞いたことがない。

神様はいったいどうやってこんな凄いものを？

「なんだい、その顔はせっかくの僕からのプレゼントなのに。」

「あ、いえ、嬉しいです！ すごく！ ただ、その神様。このナイフってどうやって…」

「なーにちよつとした伝手さ。もちろん代金は僕が払うから君は安心してモンスターを倒しておいで。さすがにキリト君も一人じやいつまでも持たないだろ」

「そうだ、いま優先すべきはキリトに助力に行くことだ。」

「神様行つてきます！ ナイフありがとうございます！」

「いつてらっしやい」

神様に見送られながら元の道に引き返す。

多少上がったステータスのおかげでそこまで時間をかけずに到着した。

「ガアアアアアア！」

戻ってきた道ではキリトが二匹のフアングの猛攻を凌いでいた。

猛攻と言つても二匹は連携を知らないようで、バラバラなタイミングで拳を繰り出していた。

それどころか互いの拳がお互いの邪魔することさえある。

「おまたせ、キリト！」

「来たか、ベル！ 白い方から頼む。」

「了解！」

フアングと達とキリトの距離が離れたタイミングでキリトと合流する。ほんとは気づかれてないうちに不意打ちでもしときたかったけど場所が悪い。

不意打ちは諦めてキリトの指示に従う。

手に先ほど渡されたヘステイアナイフを感じながら全力で敵との距離を詰める。

さっきの互いの邪魔にお互いが怒って離れているから、狙いやすい。

「ブモオオオオオオオ!!!」

フアングは目の前に僕が来たことで、怒りをたぶんに含んだ咆哮を上げながら手を組んで振り下ろす。

受ければただでは済まない。なら受けなければいい。

迫りくる拳を済んでのところで躲しながらナイフを添える。あとは勝手にフアング自身が斬られに来る。

ブルーバードにしたことと同じだが、怒りまくった状態のフアングは見事に右腕に血の線を自ら作った。

「ブモ?」

血がだらだらと出る右腕を不思議そうに眺めてるフアングの心臓（魔石がある部分）にナイフを突き刺す。

「…ブウ…」

フアングが右腕の負傷にようやく気付いたのと魔石が壊れるのは同時だった。

これで一体。

キリトの方は？ 黒いフアングを相手にしてるはずの相棒に目を向ける。

「だあ固いなオイ。というかやっぱり俺の武器って前より性能下がってないか?」

「ブ、ブモ」

滅多刺しにした。

フアングの皮膚を斬れない剣での斬りかかりより、突きの方がダメージを与えるだろうとの考えだろうけど酷い。

なんていうか惨い。

全身に突きによる穴が開いたフアングは心なしか怯えている様に見える。

というか怯えてる。現にキリトから逃げ出した。

「あ、おい待てー!」

「大丈夫、僕がやる」

逃げるだろうと考えてたので、すぐさま反応できた僕は、キリトがつけた穴からフアングの後ろ足にナイフを滑り込ませる。

「ブモオオオオオ!!」

その悲鳴は哀愁を乗せていた。

片足が斬りつけられた事で、バランスを崩したフアングを体当たりで倒しそのまま魔石を壊す。

こうして、僕らの方にやってきたモンスター処理は完了した。